

## LGBTからSOGIEへ —大学生の意識調査と相談事例から—

### The Research on the Changing Awareness and Attitudes toward Sexualities from LGBT to SOGIE —Through the Awareness Survey of Sexualities for University Students—

中山 俊 昭\*<sup>1</sup> ・ 松 尾 将 作\*<sup>2</sup>  
NAKAYAMA Toshiaki MATSUO Shosaku

#### 要 旨

LGBTQ関連については多くの学生が、小学校、中学校、高等学校を通じて学んでいることが明らかになった。また、SOGIEの概念で自分自身のセクシャリティの属性を回答してもらった結果、多くの学生が、生物学的性別と性自認が一致し、性指向は、ヘテロセクシャルであり性表現も生物学的性別に一致している者が多かった。

しかし、性指向に関して、約7%の学生がバイセクシャル傾向にあり、性表現では、男女で統計的に有意な差がみられた。この結果から、生物学的女性の方がジェンダーの垣根を越えた性表現をしていた。また、事例では相談者の性自認に対する揺らぎが中心に語られた。

さらに、自由記述では、「SOGIE」の概念を学ぶことにより、セクシャリティ問題は、「他人ごと」ではなく「自分ごと」としてとらえるようになったとの記述が多くみられた。

#### Abstract

It was found that many students learned about LGBTQ-related issues through elementary, middle, and high school. When asked to respond to the SOGIE concept of their own sexuality attributes, most students were consistent with their biological sex and gender identity, and many were heterosexual and their gender expression was consistent with their biological sex in terms of sexual orientation.

However, about 7% of the students tended to be bisexual with respect to sexual orientation, and there was a statistically significant difference between males and females in terms of gender expression. The results showed that biological girls were more likely to express their sexuality across gender boundaries. In addition, the case studies focused on the consultants' wavering about their gender identity.

In addition, many of the free descriptions stated that learning about the concept of "SOGIE" helped them to see sexuality issues as "their own problem" rather than "someone else's problem."

キーワード：SOGI LGBT 教育 大学生 セクシャルマイノリティ  
keywords : SOGI LGBT Education students Sexual Minority

## I. はじめに

### 1. 背景

近年、「LGBT」や「LGBTQ+」（以下、「LGBT」や「LGBTQ+」の場合のみ「LGBT/LGBTQ+」と表記する）という言葉がテレビやインターネット上でみかけることが多くなり、言葉の認知度は高まった。

また、「電通ダイバーシティ・ラボ」は、2020年12月、20~59歳の計60,000人を対象としてLGBTに関する全国調査を行った。結果は、LGBTQ+層の割合は8.9%であることや「LGBT」という言葉の浸透率は約8

割であるとの報告があった。この結果からも「LGBT」という言葉の理解は進んでいることがうかがえる。

しかし、特記すべきは、LGBTQ+に関する知識はあるが課題意識はあまり高くなく「知識ある他人事層」（34.1%）という人たちの割合が最も多かったと報告している。

この結果は、「LGBT/LGBTQ+」は理解が進んでもあくまで「他人ごと」であり「自分ごと」ではないということになる。

中山（2021）は、大学生を対象に行ったセクシャ

\*<sup>1</sup>大和大学教育学部 \*<sup>2</sup>私立大学・公立学校スクールカウンセラー

ルマイノリティの意識調査で、「LGBT」という用語は141人中124人、約88%の学生が知っていたと報告し、また、その調査の自由記述では、「否定はしないが、自分とは違う人であり、理解や同情はするが…」「そのような人に出会ったことがない」「他人事ですがかわいそうだと思います」等の意見もみられ、セクシャリティにおいては、誰も対等であるとの思いは読み取れなかった。このように「LGBT」という言葉は認知されればされるほどマジョリティ対マイノリティという差別的な構造になるという一面があると考えられたと報告している。

このような状況の中、最近ではインターネット上で、各自治体が住人向けの人権啓発コラムや職員向けの人権マニュアルにおいて、「LGBT/LGBTQ+」の他に「SOGI」や「SOGIE」（以下、「SOGI」や「SOGIE」の場合のみ「SOGI/SOGIE」と表記する）という言葉を使用することが増えている（例えば明石市（2022）、三重県（2022）、多摩市（2022）、板橋区（2020）など）。

「SOGI」は、「Sexual Orientation」と「Gender Identity」の頭文字を合わせたもので、直訳すると「性的指向」と「性自認」とになる。この「性的指向」と「性自認」はすべての人が持っている属性である。したがって、この概念には、マジョリティかマイノリティかの区別はない。

さらに、最近では、「SOGI」の考えに、自分らしい性表現「Gender Expression」を加えて「SOGIE」と表現することも増えている。

「SOGI/SOGIE」の考えは、「LGBT/LGBTQ+」というセクシャルマイノリティのくくりではなく、すべての人の属性としてとらえることができる。各自治体が「SOGI/SOGIE」というすべての人がもつ属性を前面に押し出してきたのは、マイノリティの人への配慮という意味ではなく、すべての人は対等で平等であるという人権尊重の精神に基づいていると考えられる。したがって、教育現場では、「LGBT/LGBTQ+」より「SOGI/SOGIE」の概念で学んでいくのがよいのではないかと思われる。

しかし、教育現場では、まだまだ、「SOGI/SOGIE」の視点が根づいているとはいえない。前述の中山（2021）の調査では、「SOGI」に関しては141人中4人、約3%の学生しか「SOGI」という言葉を知らなかったと報告している。

また、今回のアンケート調査を実施するにあたり、予備調査（2022年7月～9月）として、ゼミ学生他30名程度に「SOGI/SOGIE」という言葉を知っているか対面で質問したが、ほとんどの学生が「SOGI/SOGIE」という言葉を知らなかったという現実があった。

## 2. 目的

そこで、本論文では、まず、「SOGI/SOGIE」という言葉の認知が2年前と比べてどれだけ進んでいるかということについてアンケートを実施し、分析することを目的とした。

また、「SOGI」からGender Expressionが追加され「SOGIE」という表現になったことをふまえ、このGender Expression部分の回答に関して、生物学的男性、生物学的女性と性表現で統計的処理を行い分析することにした。

さらに、教育相談場面におけるセクシャルマイノリティ関連の事例も加え、「SOGI/SOGIE」の概念を中心にセクシャルマイノリティ教育のあり方を総合的に分析、考察することも目的とした。

なお、本論文に関して、学生は教育心理学の授業の一環として「SOGIE」に関する内容の講義を15分程度受け、その後、アンケートに回答するという手続きをふまえるため、あくまで、本学教育学部1年次生の結果として報告する。

また、「Ⅲ.事例」及び「Ⅳ.総合考察の2. 事例から」を松尾将作が担当執筆し、その他はすべて中山俊昭が担当執筆した。

## Ⅱ. アンケート調査の方法

### 1. 研究対象

授業終了15分前に「SOGI/SOGIE」の講義を聞いた教育学部1年次生210名にアンケート調査を行った。

195名から回答を得、欠損値データを省いた193名（男性87名、女性106名）のデータを研究対象とした。

### 2. 期間

調査2022年09月27日～28日に配信。09月30日に締め切った。

### 3. 調査手続き

教育心理学の授業の一環として「SOGIE」に関する講義を15分程度行った後に、グーグルフォームで作成したアンケートに答えるという手順で行った。匿名性を担保するためにアンケートはQRコード化して配布した。

アンケート内容は、「LGBT/LGBTQ+」及び「SOGI/SOGIE」の認知度に関する質問と自分自身の属性を振り返ってみたら自身は、どのような属性になるのか等についての自由記述である。

### 4. 倫理的配慮

「SOGI/SOGIE」に関するアンケートを実施するにあたり、グーグルフォームで作成することにより完全匿名化して回収することができる。回答は強制ではなく任意

である。また、学生へのアンケート記述に対する評価を一切行わない。これらの条件にて学内倫理委員会の許可を得た。

## 5. 質問内容

### (1) 生物学的性別

- ①女性 ②男性 ③どちらでもない  
④答えたくない

### (2) SOGIまたはSOGIEという言葉の意味を今日の授業を受けるまでに知っていましたか。

- ①はい ②いいえ

### (3) あなたは、今日の授業までに、SOGIやSOGIEに関する学習をしたことがありますか。

- ①はい ②いいえ

### (3-1) 「ある」と答えた方にお聞きします。どこで学習しましたか。(複数回答可)

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他

### (4) あなたは、いままで、LGBTやLGBTQ+関連の学習を受けたことがありますか。

- ①はい ②いいえ

### (4-1) 「はい」と答えた方にお聞きします。どこで学習しましたか。(複数回答可)

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他

### (5) 強制ではありません。差し支えなければ、自分自身のセクシャリティにチェックしてください。

#### (5-1) 性自認

- ①女性 ②男性 ③どちらでもない

#### (5-2) 好きになる性

- ①女性 ②男性 ③両性 ④性愛対象なし

#### (5-3) 服装等の性表現

- ①生物学的性に準じた表現  
②生物学的性と反対の表現  
③生物学的性に時に準じていない表現

### (6) SOGIEの概説を聞いた後、自分がSOGIEの概念で自分自身の属性を振り返ったらどのような属性になるのか等について自由に書いてください。

## 6. 分析方法

(1)～(5)の質問は数量データで分析を行った。統計的手法を用いる際にはSPSS Ver22を用いた。なお、単純集計において、明らかに統計的な意味がない場合は $\chi^2$ 検定を行わないこととした。

また、(6)の自由記述はテキストマイニングのフリーソフトであるKHコーダ3を用いた。

## 7. アンケート調査(1)～(5)数量データ部分の結果と考察

### (1) 「生物学的性別」の人数

生物学的性別の人数を表1に示した。

「③どちらでもない」及び、「④答えたくない」という質問に対する回答はなかった。すべての学生が生物学的な男性か女性で回答している。

表1 生物学的性別

n=193

	①女性	②男性	③どちらでもない	④答えたくない
有効回答数	106 (55%)	87 (45%)	0 (0%)	0 (0%)

### (2) 「SOGIまたはSOGIEという言葉の意味を今日の授業を受けるまでに知っていましたか」

回答結果を表2に示した。

「SOGI/SOGIE」に関しては、9人は知っていたが、その他184人は今日の授業を受けるまで全く知らなかったと回答した。この結果から、「SOGI/SOGIE」の認知度において低いことが明らかになった。

表2 SOGI/SOGIEという言葉の意味を今日の授業を受けるまでに知っていた

n=193

①はい	9 (5%)	②いいえ	184 (95%)
-----	--------	------	-----------

### (3) 「あなたは、今日の授業までに、SOGIやSOGIEに関する学習をしたことがありますか」

回答結果を表3に示した。

「はい」の回答は全体で5%程度である。教育現場では、まだまだ「SOGI/SOGIE」という表現を使用したり、意味を教授したりしていないことがうかがわれた。

表3 SOGIやSOGIEに関する学習をしたことがある

n=193

①はい	9 (5%)	②いいえ	184 (95%)
-----	--------	------	-----------

### (3-1) 「『ある』と答えた方にお聞きします。どこで学習しましたか(複数回答可)」

回答結果を表4に示した。

複数回答はなく、小学校でSOGIEの概念を教えられたとの記憶がある者は全くなかった。小学生に、性に関する「自分ごと」の属性を教えることは難しいからかもしれない。しかし、中学校、高等学校と学年があがるにつれて学習の機会も増えてきている。これは、発達のにも思春期や青年前期にあたる中学生、高等学生ぐらいにならないと「自分ごと」に関する「SOGI/SOGIE」の理解が難しいと教える側は判断しているのかもしれない。

表4 SOGIやSOGIEに関する学習をどこで学習しましたか  
(複数回答可)※複数回答なし

①小学校	②中学校	③高等学校	④その他
0	3	5	1

(4) 「あなたは、いままで、LGBTやLGBTQ+関連の学習を受けたことがありますか」  
回答結果を表5に示した。

表5 あなたは、いままで、LGBTやLGBTQ+関連の学習を受けたことがありますか n=193

① はい	② いいえ
147 (76%)	46 (24%)

「LGBT/LGBTQ+」関連の学習に関しては、76%の児童、生徒が受けていた。しかし、逆にいえば全体の1/4の学生が記憶の中ではあるが、「LGBT/LGBTQ+」関連の学習を受けていないという結果でもある。

(4-1) 「『はい』という方にお聞きします。どこで学習しましたか(複数回答可)」  
回答結果を表6に示した。

小学校よりも中学校、中学校よりも高等学校の方がよく学習しているという結果になった。この結果は記憶の新しさにも関係しているかもしれない。しかし、どの校種でも「LGBT/LGBTQ+」関連の教育は行われていることもわかった。

表6 LGBTやLGBTQ+関連の学習をどこで学習しましたか  
(複数回答可)

①小学校	②中学校	③高等学校	④その他
32	106	111	5

(5-1) 「生物学的性別と性自認」について  
回答結果を表7に示した。

男性で性自認が女性であると回答した者は1人もいなかった。女性では性自認が男性であると答えた者は2名いた。また、他に、男性で1名が自分自身の性自認が定かでないとの回答があった。

表7 生物学的性別と性自認のクロス表 n=193

		性自認		
		男性	女性	どちらでもない
性別	男性	86 (99%)	0 (0%)	1 (1%)
	女性	2 (2%)	104 (98%)	0 (0%)

(5-2) 「生物学的性別と好きになる性」について  
回答結果を表8に示した。

男性で2名、女性で3名の学生において同性愛傾向の回答があった。また、男女で13名がバイセクシャル傾向にあるとの回答結果であった。他に1名アセクシャルとの回答があった。

表8 生物学的性別と好きになる性のクロス表 n=193

		性指向			
		男性	女性	両方	性愛なし
性別	男性	2 (2%)	83 (95%)	2 (2%)	0 (0%)
	女性	91 (86%)	3 (3%)	11 (11%)	1 (1%)

(5-3) 「生物学的性別と服装等の性表現」について  
回答結果を表9に示した。

性自認が「どちらでもない」の1名を除き、男性87名、女性105名、合計192名で $\chi^2$ 検定を行った。結果、生物学的性の男性、女性において有意な差がみられた。今回の調査研究では、生物学的男性よりも生物学的女性の方がジェンダーレスな性表現を行う者が多い傾向にあるようである。

表9 生物学的性別と服装等の性表現のクロス表 n=192

		性表現	
		生物学的性に準じた表現	生物学的性に準じていない表現
性別	男性	82 (94%)	5 (6%)
	女性	84 (80%)	21 (20%)

$\chi^2=8.108$   $df=1$   $P<0.01$

## 8. 数量データ部分の全体考察

本調査では、「SOGIE」という言葉を知っているかとの質問に対して知っていた学生は、9名(5%)であった。この9名に対して、どこで学習したか尋ねたが複数回答は全くなく「SOGI/SOGIE」の概念はまだまだ学校現場で広がっていないことがうかがわれた。しかし、母集団が異なるので一概にいけないが、中山(2021)の前の調査では200名中、5名(2.5%)が知っていたと答え、ほんとうに微増ではあるが広がっているともいえる。また、インターネット上において、「SOGI/SOGIE」という言葉で検索すると、多くの自治体(例えば、2022年12月10日の閲覧では、三重県、明石市、多摩市など多数)で「SOGI/SOGIE」や「SOGIハラ」に関する知識情報や実践活動が掲載されていた。したがって、今後はさらに広がりをもてていくと思われる。

また、「LGBT/LGBTQ+」関連は多くの学生が、小学校、中学校、高等学校を通じて学んでいることが明らかとなった。

続いて、「SOGI/SOGIE」の概念で自分自身のセクシャリティの属性を述べてもらった結果、多くの学生が、生物学的性と性自認が一致しており、性指向も、ヘテロセクシャル（異性愛）であり、性表現も生物学的性別に一致している者が多かった。

しかし、性指向に関しては約7%の学生がバイセクシャル傾向であると回答した。性表現では13%の学生がジェンダーの垣根を越えた性表現をしていると回答した。統計的な処理では、性表現において有意な差がみられた。この結果より、女性の方がよりジェンダーレスな性表現を行っていることがうかがわれた。この理由は、生物学的男性から女性モードへの服装は見た目のイメージ変化が、女性から男性モードへのチェンジより大きく、違和感を抱きやすいというジェンダーステレオタイプの影響があるのかもしれない。

いずれにせよ、アンケート結果より、セクシャリティに関する意識理解や教育は少しずつではあるが進んでいるようである。

### 9. (6) 自由記述部分の結果

#### (ア) 自由記述部分の概略

自由記述は193名中132名から回答を得た。そのうち、講義を受けて、自分も「SOGI/SOGIE」の中に入られると読み取れる者が110名いた。意見の共通点は「誰も関わっている」「みんなが当事者である」「見て見ぬふりはできない」といったものであった。

また、否定的ではないが、「誰しも好きなように生きればよい」「誰しも自由」「他者がとやかくいうことではない」というような意見もみられた。結果的に、「SOGI/SOGIE」は自分の属性でもあるというような記述内容ではない意見が17名からみられた。否定的意見としては、「SOGIEやLGBT等の言葉が嫌いである」等の内容の意見が5名からあった。

#### (イ) 自由記述のテキストマイニングによる分析

##### 1) 分析方法

自由記述の問いについては、アンケート部分の分析を行うにあたり、できる限り恣意性を排除する目的と、自由記述の視覚化を意図し、テキストマイニングの手法で分析した。テキストマイニングは文章データを形態素解析し、数値化、多変量解析によりデータを処理したものである。

##### 2) 記述の統計量

「思う」及び「助動詞」、「助詞」は省き分析を行った。その結果、総抽出語の数は7,685、異なり語数は850、文は310であった。なお、異なり語とは、同一の語彙が複数回登場しても1語とみなす数え方のことである。

### 3) 記述の統計量

10回以上の頻出単語を並べると、「人」「自分」「好き」「当事者」「SOGIE」「知る」「言葉」「問題」「考え方」「LGBTQ」「必要」「性」「違う」「セクシャリティ」「性別」の順に特徴語が並んだ。頻出単語と出現頻度8回以上の語を表10に示した。

表 10 自由記述の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	93	概念	15
自分	78	自由	15
好き	45	LGBT	14
当事者	44	差別	13
SOGIE	38	持つ	13
知る	35	大切	13
言葉	31	それぞれ	12
問題	31	意識	12
考え方	27	多い	12
LGBTQ	24	当てはまる	12
必要	24	聞く	12
性	23	初めて	11
違う	22	認める	11
セクシャリティ	18	理解	11
関係	18	話	11
属性	18	マイノリティ	10
性別	17	周り	10
良い	16	全て	10

### 4) 頻出単語の分析

頻出語の中より筆者らが特徴語として気になった言葉「当事者」「SOGIE」について分析した。

#### (A) 「当事者」についての結果と考察

自由記述アンケートで、「当事者」は44回出現している。「SOGIEはセクシャリティに関して人の属性を表している。したがって、すべての人がもち合わせているもので、別の視点で見ればある意味、全員が当事者といえるということになる」と講義の中で説明したためか最頻出単語の一つとなった。そこで、この単語をどのような意味合いで書いているのか原文にあたり分析する。

まず、「当事者」という単語が含まれている自由記述を肯定的表現か否定的表現かに分類し、代表的なものをいくつか挙げる。

a. 「当事者」肯定的表現例

- ・当事者意識は大切だと思う。一人一人が考えることが大事。
- ・当事者として当てはまると仲間意識というような感覚があると思った。
- ・当事者でもあるということにより身近に感じるし、他人事としていい加減な扱いをする人が減らせる。
- ・当事者であるという概念は今後さらに必要になってくる。
- ・当事者であるという考えは同じである。
- ・当事者だという概念を広めた方が良い。
- ・当事者であるという考えであれば、多くの人に関心を持つようになると思います。
- ・当事者であるという意識があることで更に深くSOGIEについて知りたいと思いました。
- ・当事者であることから、より深く学んでいく必要性を感じる。
- ・当事者だと言う考え方を持っている方が、配慮もしやすくなるだろうし、差別とかも少なくなると思う。

このように肯定的な意見がほとんどであるが、否定的な表現もみられた。

b. 「当事者」否定的表現例

- ・当事者だと言ってきて都合が良すぎるのではないかと思った。
- ・当事者なのかそうでないのかという考えは好きではありません。
- ・当事者で対等であるといってもどこかで違うように思われるのかなという風を感じた。
- ・当事者意識は芽生えない。もっと注意を引きやすい行動を起こして意識させることが必要だと思う。

このように44例中4例に否定的な表現がみられたがこの短時間の講義でも「SOGI/SOGIE」の概念は伝わり、自身のセクシャリティを振り返ることができたからこそ、このような内容の記述が多くみられたのではないかと思われた。

(B) 「SOGIE」についての結果と考察

続いて、気になった言葉として「SOGIE」がある。「SOGIE」という言葉をどのように解釈して記述しているかを原文より検証する。

「SOGIE」の出現回数38回であった。この言葉を含む文の最も多い表現例は「授業で初めてSOGIEという言葉を目にしました」「初めて学びました」「誰もが当事者ということなので私もその一人です」「これからもっと学びたい」などであった。

次に「LGBTQ+」と比較しての内容が13例あり、多くの表現は「今まではLGBTという言葉しか知らなかったが、違和感を感じなかった」という意見が多くみられた。しかし、2例「違和感を感じていた」との記述もあった。他に「自分は関係ないと思っていたが関係あることに驚いた」の表現が複数みられた。

また、完全な否定的表現はなかったが、1例「SOGIEという言葉は本日初めて聞きましたが、LGBTとの違いはあまりわかりませんでした」というように、短時間での講義では、自分のなかで意味がはっきりしないという意見もあった。

さらに、「SOGIE」そのものとは関係ないが、「誰しも多様性はあるが犯罪にならなければ多くの人認めていると思うのでSOGIEも今後より多くの人に理解を得られるんじゃないのかなと思った」という記述がみられた。この「犯罪にならなければ」の意味合いの検証も今後、必要と思われた。

全体的傾向として、自由記述の特徴語からは、「SOGIE」を正しく理解しようとの思いが読み取れる意見が多くみられた。

(ウ) 共起ネットワークからの考察

次に、共起ネットワークでの頻出語の関係性を検証する。

共起とは、あるキーワードが出現するときに、一緒に出現する(利用される)語のことをいい、KHCoder 3では、ある語とある語の共起性、関係性を視覚的にとらえることができる。

共起ネットワーク図は、自由記述内の各頻出単語6回以上で設定した。なお、頻出回数が多い単語ほどバブルが大きく表示され、結びつきの多い単語は太く表示される。これらの語を基に、各単語は、どの言葉と多く共起したのかの共起ネットワーク図を図1に示した。

図1の各バブルの単語の係り受けネットワークより、大きなクラスター群の大きいバブルを読むと、「セクシャリティ」の「問題」に関し、「自分」は「当事者」と「思う」又は「考える」というように読める。また、左上方のピンクのバブルでは「初めて」「SOGIE」という「言葉」を「知る」「聞く」と読める。また、小さいバブルだが、「SOGIE」を「世の中」や「周り」は「受け入れる」ということが「広がる」とも読める。

総じて、単語素解析レベルの共起でも、前述の頻出単語の原文分析からも、「SOGI/SOGIE」の概念は肯定的に受け取られているようである。

III. 事例

1. はじめに

子どもが性自認や性的指向について不安や揺らぎを感



再び体調が悪化することへの不安に苛まれることもしばしばであった。また、「先生や友だちに迷惑をかけていないか」「自分一人がついていけない気がする」と自責の念にかられ、被害的思考に陥ってしまう自身を嫌悪する表現も多くみられた。

面接の経過と共にやがてAは、“できる”体験を語れるようになっていく。生活場面における出来事に関して「なんとかできた」「他の人よりも早く合格した」などと達成感を表していた。それは対人関係においても同様で、「集まりに参加できた」「友だちと映画に行ってきた」と自己効力感を保持しつつ、体験を積み重ねていった。

面接開始半年を経た頃、「今まで話したいけど、どうしようと思いつながら悩んできたんですけど」と緊張した面持ちで打ち明け話をはじめた。「中2から自分自身の性に対して違和感を持ちつづけている。成長するにつれ性別違和を強くもつようになった。自分自身の存在がはっきりとしないから、他の人への信頼とかもあまりできない。自分は何もかもが中途半端なような気がしてしんどい」と訴えた。

さらに、「好意、人を好きになるという感覚はわかるが、異性への好意…、恋愛感情はわからない。だから、好意を持つが、どう接していけばいいかわからない。将来のこと、恋人とか家族とか考えると全然将来が見えない。考えるとしんどくなる…」と語った。

#### <考察>

自身がトランスジェンダー、Female to Maleであろうと初めてカムアウトしたAであるが、性別違和を感じた中学時代から偏見を恐れて誰にも相談できずに不安を抱えつづけていた。いったい自分は何者なのかという自身への問いはセクシャル・アイデンティティが決定できない自己に向けられ、集団不適應といった生活面への支障をきたしたのであろう。その影響は、パニック障害やうつ病を患ったことにまで及ぶともいえるだろう。性自認が曖昧で性的指向も自身で納得できないため他者との安定した関係性を築くことが困難であった。本来喜ばしいとされる他者への好意に戸惑い、そうになってしまう自身への自己嫌悪を感じ、生きづらくさせていた。

### 3. 事例(2)

クライアントは10代男性のCである。「性同一性障害について相談したい」「どう思いますか、僕っておかしいですか」とCは、ハキハキと話しはじめた。年齢よりも小柄でふくよかな感じで短髪、ピンク色のシャープな形状の眼鏡をかけ清潔感があつた。非常に艶やかな肌で、惹きつけられるような目が印象的であつた。

「僕を見た瞬間、先生の表情や雰囲気が変わりました

よね。そういうのって瞬間にわかるんです。でも、どうして相手がそうになってしまうのかもわかっています」。それからCは、自身のこれまでの体験を語り始めた。体育の着替えの際に、友人の下着姿を見て、性的な興奮を覚えたことに驚きや戸惑いを感じ、「自分は男だけど、男が好きなのかもしれない」と思った体験を記憶の中に今も鮮明に留めていた。「当時は恥ずかしい、隠したいと思っていた。でも、自分が誰かを好きになる気持ちになぜ罪悪感をもたないとだめなのかも理解できなかった」「自分のことを話した相手は必ず自分から離れていったけど、自分の気持ちに嘘をつくことだけはやめようと思いつながら今までやってきた」と凛とした態度で語った。

またCが怒りを露わにする機会もあった。「僕たちは一般的な男性を好きになってもほぼ願いは叶えられない。だから、そういう人たちだけのサークルみたいなネットワークがあつて、そこで出会うしかない。遠距離恋愛とか当たり前。でも難しいけれどパートナーができるとどれだけ嬉しいか」「素敵な男性と話をしようと思つた積極的にいくことは当たり前じゃないのですか？どうして自然なことをしているのに、キショイと言われ、距離をおかれなければならないのですか」。

Cは、来所時すでにジェンダークリニックの通院を重ねており、数ヶ月後には性別適合手術の予定も組んでいた。最終回「もうここは去るんです…。住みづらいですし、都会で新たに生活していこうと思つています」と堂々と語った。わずか4回だけの面接であつた。

#### <考察>

すでにCは、Male to Femaleとして性自認や性的指向は自己決定できており、ジェンダーアイデンティティへの自己嫌悪や葛藤などは少なく感じられ、都会での自由を求め将来への希望を持っていた。しかし、当初、トランスジェンダー当事者としての生活上の問題やトランスジェンダーに対して、まだまだ理解されているとはいえない社会的な無理解や差別に対する嫌悪感、恋愛はセクシャルマイノリティ当事者同士の性的コミュニティが中心であるという傾向への不条理さを心の奥に抱えていた。Cにとってジェンダーアイデンティティの決定に至るプロセスは容易ではなく、心と記憶には傷つきとその苦痛を感じさせるものであつた。

## IV. 総合考察

### 1. 「SOGI/SOGIE」について今回の調査報告から

近年、「LGBTQ+」という枠に収まらない多様な性のあり方も提起されるようになってきた。例えば、「アセクシュアル（恋愛感情や性的欲求を抱かないこと）」「Xジェンダー（性自認が男性でも女性でもない



こと)」「パンセクシャル(全人愛)」など。また、「LGBT」の認知度が高まれば高まるほど、マイノリティ対マジョリティの構図もできあがってきた。そこで最近では、「LGBT/LGBTQ+」などのセクシャリティを表す言葉と共に「SOGI/SOGIE」という言葉が広まりつつある。

しかし、少なくとも今回のアンケートを読む限りにおいて、教育現場では「SOGI/SOGIE」の意味や考え方は、まだまだ認知されているとはいえない状況であった。

また、今回の調査では、「SOGI/SOGIEは全ての人の属性であり、ある意味、全員が当事者であるという考えになるかもしれない」との内容で講義を行った後にアンケート調査を実施したため、「自分ごと」的な視点での自由記述が多くみられた。この結果から、「SOGI/SOGIE」の考えを教育現場で丁寧に伝える取り組みで、自他のセクシャリティ理解が進んでいくことが期待できるのではないかと感じた。

## 2. 事例から

事例からみえてくるものは、クライアント一人ひとりに表現されているジェンダーアイデンティティのあり方である。「自分はいったい何者か」「どのように人とかわかり合っていきたいのか」という“生き方”の問題が問われている。トランスジェンダー当事者であるかどうかにかかわらず、人はそれぞれに“こうありたい私”と“そうできない私”の狭間で揺れることもある。そこにトランスジェンダーとしての揺らぎ、苦しみ、生きづらさが加わっていたように感じられた。人には、その人独自の性のありようが存在し、決して一括りにはできない。すべての人が、性自認や性的指向において、何らかの属性をもっているという教育を受けていれば、他者との違いにそれほど心を痛めなくてもよかったかもしれない。そのような意味においても、マイノリティかマジョリティではなく、全ての人が性の属性をもっているSOGIEの考えを学校現場で広げることができていたなら、性自認の揺らぎに関して、限られたコミュニティの中でしか理解されないというような悩みは少なかったかもしれない。そのような観点からも「SOGI/SOGIE」の考えを広めていくことはとても重要なことである。

## 3. 今後の課題

吉本(2022)は、勤務先大学において、性のあり方の多様性に関する意識調査を学生及び教職員に対して行った。そのなかで「アウトティング等、重要な項目について、回答者の半数以上が認識していないことが明らかになった」と述べている。アウトティングとは、性自認や性的指向を本人の了解なしに暴露することを意味する。

たとえ悪意のないアウトティングであったとしても、本人の理解がない場合は絶対に行ってはいけない行為である。アウトティングが原因で自殺者がでることもある。人の生死に関わる重大行為でもある。

また、「SOGIハラスメント」という言葉がある。これは性自認や性的指向に関する侮辱的言動のことである。具体的には、「おまえホモかよ〜、気持ちワル」「おかまばい」「おなべばい」等である。これらの言葉は2020年からのパワハラ防止法においてパワハラに該当すると明記された。また、2022年4月からは、パワーハラスメント防止措置が全企業に義務化された。

さらに、吉本(2022)は、性的マイノリティ関連の用語を学生は授業で知ったと答えていると報告。このことから性的マイノリティ関連の授業を行う場合はアウトティングについても言及することの必要性を述べている。

また、藤井・神谷(2022)は、「多様性への適切な対応は、大学教育においても国際標準になっている」と述べている。

他に、風間ら(2022)の調査では約4割の大学教員が性的マイノリティの学生に出会い、約1割5分の教員が勤務している大学で性的マイノリティの教職員に出会い、また1割5分の教員が大学で性的マイノリティに関して差別的・否定的な言動を見聞きしたと報告している。

今後、ハラスメント防止法の指針も視野にセクシャリティに関する教育を小学校、中学校、高等学校だけでなく大学教育の場でも推進していく必要があるだろう。

## V. おわりに

前述の電通の調査からは約9割の人が「性の多様性」を学校教育で教えるべきと回答している。今回の調査集団においても性の多様性がみられた。7%の学生がバイセクシャル傾向であると回答し、性表現では13%の学生がジェンダーの垣根を越えた性表現をしていると回答している。この結果からセクシャリティに関する教育は身近で重要なものであることがわかる。特に学校関係者は児童、生徒、学生に教える立場の者として、今一度、「SOGIE」の視点で自身の属性を再考し、「SOGIE」ハラスメント問題も含めセクシャリティに関する教育を推進すべきときであると感じた。

## 文献

明石市SOGIE 掲示版

<https://www.city.akashi.lg.jp/seisaku/sdgs/lgbtqsogiekiso.html> (2022年12月09日閲覧)

観光経済新聞社：【データ】LGBTQ+調査2020電通調べ 2021年04月14日号

<https://www.kankokeizai.com/> 【データ】lgbtq調査  
2020%e3%80%80電通調べ/ (2022年12月09日閲覧)

藤井ひとみ・神谷 悠一：大学における根拠に基づいた  
性的多様性への対応 大手前大学論集 21 53-67  
大手前大学 2022

板橋区：多様な性に関する職員ハンドブック2022年  
3[https://www.city.itabashi.tokyo.jp/tetsuduki/jinken/  
danjo/kankoubutsu/1038538.html](https://www.city.itabashi.tokyo.jp/tetsuduki/jinken/danjo/kankoubutsu/1038538.html)  
(2022年12月09日閲覧)

風間孝・釜野さおり・北仲千里・藤原直子・林夏生：  
大学教員の性的指向・性自認(SOGI)についての知  
識と態度に関する全国調査報告 社会科学研究 42  
—2 1-31 中京大学先端共同研究機構社会科学研究所 2022

三重県：多様な性のあり方を知り、行動するための職員  
ガイドライン  
[https://www.pref.mie.lg.jp/IRIS/HP/m0052600172.  
htm](https://www.pref.mie.lg.jp/IRIS/HP/m0052600172.htm) (2022年12月09日閲覧)

中山俊昭：大学生の意識調査からみえるセクシャルマイ  
ノリティ教育について 大和大学研究紀要 7 73-  
82 大和大学 2021

多摩市ホームページ  
<https://www.city.tama.lg.jp/0000015416.html>  
(2022年12月09日閲覧)

吉本, 圭佑：性のあり方の多様性に関する龍谷大学生・  
教職員の意識調査報告  
龍谷政策学論集 11 59-77 龍谷大学政策学会  
2022